

# 企画 2 | 文京区の写植職人・出版文化を守れ!!

団体の名称

商学研究科・貿易サークル

代表者氏名・学部学科名等

関根 智子  
商学研究科 商学専攻博士前期課程 1年

## 実施期間・日程

平成23年7月～12月

## 実施内容

私たちは母校拓殖大学のある文京区の出版印刷文化の保護と日本でもっとも出版・印刷企業が集積した同区の持つ出版印刷技術の伝統継承のため、出版文化についてのインタビューや博物館の見学を行い、どうすれば良いのか、その方策を検討しました。まず、1) 文京区シビックセンターの広報課と経済課へインタビューをし、「文京区の出版文化を守れ!」の企画を説明し、出版文化について詳しく話を伺いました。明治11年、近代国家建設のために文京区は、用地の確保も容易であったので、多くの学校が建設され、これとともに、鷗外、漱石など多くの文豪が住み、この地を舞台とした数々の名作が残されました。また文京区に多くの印刷・製本業者が密集し、発展をした結果、印刷・製本産業は、新聞・雑誌・書籍などを多く生産され、日本の文化発展を陰で支えていたということを詳しく学ぶことができました。次に、2) 凸版印刷 江戸川橋印刷博物館を見学し、出版印刷の歴史や印刷技術、実際の出

版印刷の作業や様々な出版印刷機械、出版印刷がもたらした文化の発展を直接学びました。そして、3) 横浜JICA博物館も見学をし、写植活字の原版について詳しく知ることができました。この日本の出版印刷の文化や歴史について学んでいくうちに、これからの将来を担っていく、若い人々が様々なことに関心を持つことの重要さを感じました。現在の活字離れ、印刷・製本産業の縮小を止めることは難しいかもしれませんが、しかし若い人々が、これまで日本が歩んできた歴史にしっかりと目を向けて行くことによって、文化の記憶を継承していくことが出来き、また、様々な日本の伝統文化に直接接することができる機会をより多く作っていくことによって、出版印刷文化を継承していくことが出来ると確信しました。このインタビューや博物館見学、資料調査などによってわかったことをまとめて、紅陵祭でパネルで発表をしました。



江戸川橋 印刷博物館 見学



横浜JICA博物館 活版印刷 活字

## 成果

今回の企画の目的は、失われつつある活字の職人芸、出版の文化を守ることです。そのために原因は何か、それを解決する方法は何かをメンバーで考えました。そこで学生の出版・印刷に関する意識調査を行い、現在の文京区の印刷・出版文化について広く学生たちに伝えることこそが結果的に活字の職人芸や出版文化を守ることにつながると考えました。

今回の企画の成果として、学生たちの声をいくつか挙げたいと思います。

◇印刷出版文化の中心が文京区であるということを初めて知った。本を読むということが減ってきていて、出版文化は、とても厳しい状況にあることを知った。文化保護のために様々な対策が必要であると感じた。文化的なふれあいの場をもっとつくるべきだと感じた。

◇電子書籍が昨年流行していて、出版物の割合が変化している中、日本独自の出版文化を守っていくことの難しさや大切さを痛感した。これからは、書籍の付加価値を充実させる必要があると思った。

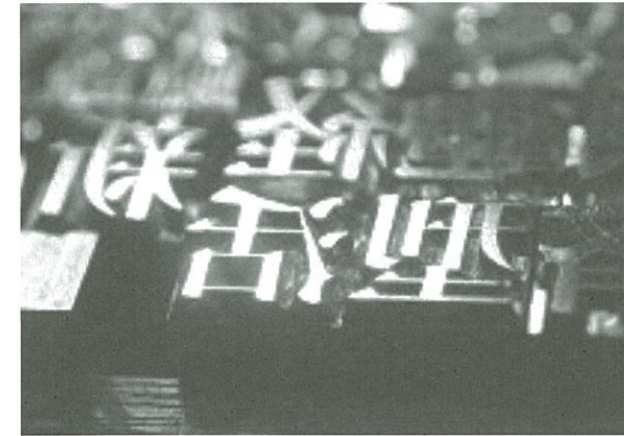
◇印刷の歴史や文化、どのように印刷技術が発展して行ったのかという過程やその背景、人々の努力や工夫についてくわしく学んだ。

◇電子書籍やiPadなどのタブレット端末が大成し、利便性が向上し、世の中が変わる時を肌で体感した裏側では、日本の文化・発展を支えてきた印刷・出版業の衰退という現実を知ることになった。

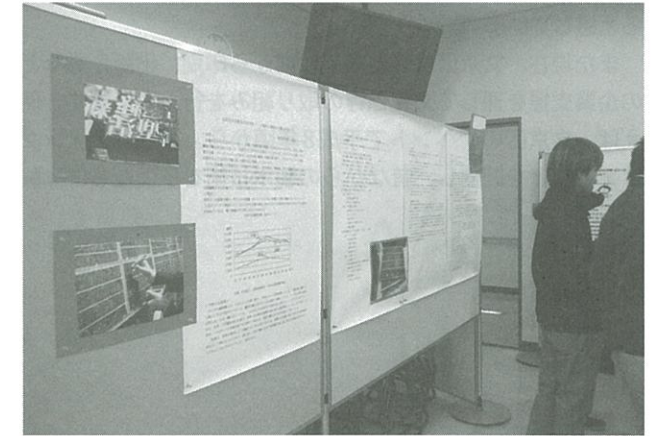
◇時代の流れというのは、急なもので、新たに生まれるものがあるれば、衰退し失われていくものもあると感じた。それに対して、失われていくものをそのままにするよりも、保存・語り継がれる日本のルーツとして、もっと構築していけば良いと思う。

◇今までは出版・活字文化がなくなっていることを漠然と感じていたが、全く気にしていなかった。しかし、今回の企画を通じて、出版・活字文化の大切さに気づいた。

◇美しい字体のおかげで子供達の勉学に良い影響を与えることや、紙に印刷された字の方が電子書籍よりも頭に入りやすいことなど、その価値について今回初めて気づかされた。



文京区役所 活版印刷 活字



紅陵祭での展示発表

反省点・感想及び意見

～インタビューを終えて～

文京の地場産業について調査していくうちに、これからの将来を担っていく、若い人々が様々なことに関心を持つことの重要さを感じました。現在の活字離れ、印刷、製本産業の縮小を止めることは難しいと思います。しかし、若い人々が、これまで日本が歩んできた歴史にしっかりと目を向けて行くことによって、文化の記憶を継承していくことが出来るのではないのでしょうか。実際、区役所の方々が昔の印刷産業の歴史を親切に、丁寧に教えていただきました。当初は、活字というテーマが大きくどう伝えるかが難しかったのですが、職員の方々が生き生きと昔の地場産業の魅力などを伝えてくださったことにより、活字の持つ歴史と伝統性はしっかりと私たちの記憶に残ったと感じます。

～企画を通じて～

今回、私達は出版・活字文化の危機から守ることをテーマに活動を行いました。日本から出版・活字に携わる職人達が海外流出していく理由としては、技術革新によって職人に代わるハードウェアが台頭した結果、印刷・出版のコスト削減のために職人達を必要としなくなったことや、製本拠点を人件費の安い海外に移転したことで、技術を伝授するために職人が海外へ出ていったことが考えられます。この企画を考えた当初は、技術の流出は日本にとって印刷・出版文化の縮小を加速化させ、さらに産業の空洞化を招くのではないかと考えていましたが、活動を続けていく中で職人や職人技の流出は、むしろ日本の職人技が海外に伝わり、その地で継承されていくことは、日本の文化がその地に根付き日本の印刷・出版文化を広く世界へと継承していける素晴らしいことなのではないか、ということに気がきました。失われつつある文化を守る上で大切なのは「伝えること」だと思います。これは印刷・出版文化に限ったことではありません。私たち学生や将来の日本の担い手となる若い人たちが文化の継承について目を向け伝承の意識を持つことが大切であると思いました。

今後の計画・展望

今後の計画として、経済産業省が主催している社会人基礎力育成グランプリなどの学外での発表会への参加を考えています。今回の企画を通じて私たち学生が出来ることはまだあると感じています。

また現在、文京区は区として以前から印刷、出版企業などの企業支援を通して文化保存の取り組みを行っています。例えば、文京区のイベントで平成8年頃から、プリンティングフェアなどを開催し、昔ながらの製本技術を子供たちに体験

してもらおうというイベントなどを開催しています。私たちが訪れた江戸川橋印刷博物館でも活版印刷を体験できるコーナーがあります。このような取り組みがあることに私たちメンバーも調査をするまで知りませんでした。この事実を学内での発表で留めるのではなく学外へ発信することで、学生たちだけではなくもっと多くの人に認知してもらい関心を喚起することで今後の印刷・出版文化の保護に繋がっていきたいと思います。

支出報告書

支出総額	153,900円
給付額	150,000円

【内訳】

品名	単価	個数	小計
(単位円)			
<b>&lt;物品費&gt;</b>			
PENTAX Q (ホワイト)レンズキット/デジタル一眼			59,800
SONY ICD-SX813 (テープレコーダー)			22,800
BUFFALO SDHC カード4GB			859
インクカートリッジ			4,580
参考資料(書籍)			20,217
<b>&lt;交通費&gt;</b>			
八王子キャンパス往復		6名×4日間	10,680
<b>&lt;その他雑費&gt;</b>			
博物館入館料			900
会合費			26,965
文具(コピー用紙、写真現像代、筆記具、色画用紙その他)			2,589
インタビュー先謝礼			4,510
			合計 153,900円